

四季古實記 卷之上

和書門			
三	五	六	三
二	架	函	號
類			

庫	文	閣	內
八	三	五	和
四	六	六	書
函	三	七	類
二	冊	號	
架			

內閣文庫	
番號	和 35637.
冊數	2 (1)
函號	184 27

史二十七

184-27



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





四ノ巻 實紀惣目録

巻之と

- 一 正月 癸元日
- 一 廿五日の事
- 一 門松竹の祝
- 一 飾物の事
- 一 羽燒の祝
- 一 糶賣の事
- 一 鯛の事
- 一 一年の事
- 一 四子作の祝
- 一 松竹の祝
- 一 燒候の事
- 一 蒸水着菜の祝
- 一 屠獲の事
- 一 歳徳神の祝



184-51

一 破魔弓
 一 蒸菜の奉
 一 十五日
 一 因十五日
 一 萬歳樂
 一 二月八日の奉
 一 二月上巳の奉
 一 巳の日後除曲水の奉
 一 七日
 一 十四日削り楯
 一 同日小麦粥
 一 女日具足
 一 涅槃の奉
 一 同草履の奉
 一 雜糸の奉

卷之下

一 雜遊の徒
 一 四月朔日之奉
 一 競馬競流の奉
 一 六月祓禊の徒
 一 同七月入上湯の奉
 一 七夕糸の奉
 一 同七月末廻り合を以水
 一 同十月蓮取利徒
 一 八月朔日四面の奉
 一 九月九日重陽
 一 同節合の奉
 一 九月始午の奉
 一 十月朔日氷の奉
 一 同十月初日湯氷の奉
 一 同十月廿五日
 一 同十月廿七日
 一 同十月廿九日
 一 同十一月例幣の徒

- 一 因十二夜の奉
- 一 十月廿一日の奉
- 一 十月中高の日陰魂シマシマの奉
- 一 十月中七を至るの奉
- 一 因十五日の奉
- 一 十二月川流原の奉
- 一 煤拂の奉
- 一 菊分を至るの奉
- 一 菊分の疾世俗換の札
- 一 歳言の奉

右惣目録 平

一 因十二夜の奉
 一 十月廿一日の奉
 一 十月中高の日陰魂シマシマの奉
 一 十月中七を至るの奉
 一 因十五日の奉
 一 十二月川流原の奉
 一 煤拂の奉
 一 菊分を至るの奉
 一 菊分の疾世俗換の札

四季古實記卷之上

四季之法禮

統前

具原篤信述

寅 亥 十三日

是ハ周ノ代ヨリカハリテ初ノ亥ノ代
正月トス今ノ正月也尚志マコト

子 周 十一月 尚文 アヤエヨウ也

巳 殷 十二月 尚質 シタチ

一 復高周ヲ三代ニテ月建各別也

周ハ天統ト云テ子ノ月ヲ正月トス

殷ハ地統ト云テ巳ノ月ヲ正月トス

一 復ノ代ノ月建ハ人統ト云テ寅ノ月ヲ正月トス今ノ

正月ナリ子ノ月ハ水旺ツリシ寒巳ノ月ハ土旺ツリシテ陰

寒^{シニフシ}慘烈^シテ万人春ト不言此ニヨリ本朝人皇ノ
寂^{イハレ}初^{イハレ}神武帝ノ御宇^{イハレ}復ノ代ノ月建ニ随テ寅ノ月
ヲ比テ一年ノ首ト定玉フヨリ人皆春ト称ス寅ヲ以
テ十二月ノ始トス邵康節ハ理教ヲ立テ一元正事
ヲ發明セリ一元ト云ハ天地ノ始リテ終ル一終始ノ事
ヲ云也十二万九千六百年ヲ以テ一元トス一元二十二會
アリ是ヲ十二支ニ配當ス一會トハ一万年ノ度也
子ノ會ノ始ハ清濁ノ氣混シテ未其氣混沌タリ
是ヲ大始ト云一先ノ始也是ヨリ漸々ニ開明五千四
百年ニシテ子ノ會ノ中ニ當テ輕ク清氣騰上テ日

月星辰ノ四物象ヲナシテ共ニ天トナル故ニ天ハ子
ニ開ク^{カキ}凡未^{カキ}疑^{カキ}清^{カキ}堅^{カキ}實^{カキ}セズ故ニ天ハ成地ハ未^{カキ}地又五
千四百年ニシテ子ノ會終リテ亦正ノ會始リ五千四
百年ニシテ丑ノ會ノ中ニ當リテ重ク濁ルノ氣疑結ス
ル者始テ堅^{カキ}實^{カキ}ニテ土石トナリ濕潤ノ氣ハ水トナリ
流シテ不凝^{カキ}燥^{カキ}烈^{カキ}ノ氣ハ火也頭^{カキ}ニテ不隱^{カキ}水火土石
ノ四物形ヲナシテ共ニ地トナル故ニ地ハ正ニ開ク^{カキ}凡又五
千四百年ニシテ丑ノ會終リ寅ノ會始リ五千四百年ニ
シテ寅ノ會ノ中ニ當テ人物始テ生シ五千四百年ニ
シテ寅ノ會終リ故ニ人ハ寅ニ生ト云也又天竺ニ卯

漢の紀宣く傳くは、けり、威の始日の始日の始日、
此後、後く正日、始日、為、歳、之、終日、の、終日、の、朔、と、是
之、朔、之、大、朔、之、取、期、の、事、也、

初、正、乃、年、と、自、日、も、始、年、と、す、

之、の、始、日、も、是、事、に、事、利、

一、漢書、律曆志、に、春、の、春、の、春、の、春、の、初、生、を、以、

象、う、り、ま、す、と、い、ふ、こ、と、也、
ウミナリ

年中

元日、の、始、日、に、神武天皇、を、辛酉、正月、朔、所、從、す、
く、り、り、時、に、初、日、始、日、と、い、ふ、今、の、志、の、傳、

元日、終、日、の、古、來、の、事、を、考、へ、る、に、正月、人、家、毎、
志、の、元、日、來、る、事、に、後、連、綿、に、終、日、と、い、ふ、事、も、亦、
理、れ、り、

一、朔、日、と、元、日、と、い、ふ、一、年、の、日、の、初、め、の、日、又、年、と、日
の、終、り、の、日、元、日、元、元、と、い、ふ、事、も、一、月、の、初、め、と
一、日、の、終、り、と、い、ふ、事、も、一、日、の、初、め、の、事、に、亦、
元、日、と、い、ふ、事、も、一、日、の、終、り、の、事、に、亦、

五ヶ日、一、年、

其、日、と、い、ふ、事、も、二、日、と、い、ふ、事、も、亦、
一、日、の、初、め、と、い、ふ、事、も、亦、

して今日も... 諸物猪羊牛馬の兵高と生人七百一人中... 穀と... 湯和... 終烈... 諸藩... 兼た...

女くして... 人... 又三朝の... 諸佛... 宗旨... 家一切... 終...

四方拜の儀

本中... 本中... 本中...

たて神のまゝに禁絶神の口九禁中の死法
先往本坊に火未且尊教神の勅意悔意う
りありさるに神をまゝに用所の方を以て神
とせびあのおのあまを以て法て心人先老能所の
柳よまをせむとまゝに帝の神とてまゝに
あまのまをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
ひまのまをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まゝにまをせむとまゝに神とてまゝにまゝに

ね竹之御本

口ねまのまをせむとまゝに神とてまゝにまゝに

まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに

まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに
まをせむとまゝに神とてまゝにまゝに

待ねくうくしてあしめ流ゆれ後之を去る
新代志く高紙をのれ九をり
わきくくもそくもるのくれ井
長成とあしめ高紙はきりくは
こあふの木の紙かえくもん
し後くもい他御のあたの作のくもろくし門
のたし作とそくあく武か建くりのれ
ゆく四作とそくあくいあ尋のこは八と一
くも尋と十くたくもあくくのくもそく
一は古くは禁中ゆく二東西南北のこまの門と法氏

一八門より一所の内と家あれくまわて五戸と
あつと戸とくも一戸のまにねと種て門の下と
せくもそくあくくあつてま屋く門とねと
まきくちんたと種もくもく一戸のねい紙と
のねと種代のまねと種代のまねとまねと種と
種との内屋うくてくもあつたのまま本集本
書取まのそく
くもあつたのままあつたのまま種と
くもあつたのままあつたのまま種と
一は古くは禁中ゆく二東西南北のこまの門と法氏

一 海老の海の家... 縁して年首の元と人々...
 一 獲いそふ熟して其の旨く年首の元と人々...
 一 獲いそふ熟して其の旨く年首の元と人々...
 一 獲いそふ熟して其の旨く年首の元と人々...

一 梅子毎けしのかくく... 元氣合ふ... 立俵の...
 一 梅子毎けしのかくく... 元氣合ふ... 立俵の...
 一 梅子毎けしのかくく... 元氣合ふ... 立俵の...
 一 梅子毎けしのかくく... 元氣合ふ... 立俵の...

一 中後、菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 中後、菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 中後、菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 中後、菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...

一 菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...
 一 菰草と糸と... 後物と名付て... 菰草と糸...

案と書て軍の奇く用くは昔一清系天皇大徳
の御文と致いりし付ら成國田系の家へ階幸りし
上人伏仰し案と書てはるらん天皇御知りし地
し程みまの内の同くせあて再推の相と致す
とらん大徳治くせむいしは運実くせりし
天皇をさるるもは決例し法ひて高家の徳業と
ふ字と記の書もさ
一 皇中紀の御代の人紀の有しは傷細く歳六百
歳と傳らりしと
一 入姿のりしと記の人紀と表し

ト記の古本紀にも天皇大徳は後國平治月と
人の紀と表して皇中と記せりしとらん
一 棋の、案の、のたの、棋の、の、用と
んを、の、棋、の、病、源、の、池、と、名、人、皇、土、代、を、仁
天皇の、治、を、名、國、と、記、し、る、と、せ、り、し、た、ら、ん、后
天皇の、治、を、名、と、用、ひ、し、る、と、記、し、る、と、せ、り、し、た、ら、ん
後延平と大和文とてつりし切使と名に
或帝古御親王と名のとてつりし切使と名に
孝臣國一則神仏秘區洛氷所臻と名にた世に
他人の位とてと蓮葉の歌と曰道同守と名に

古きまろくろくをたてて後考く又くわたり
一田代と用事本八編の仁重として述べては
あつて用事本は仁重を叙する集巻物上巻に
ありてよむゆゑはあつたの縁ゆゑ
俗に編の道本め若と書くはあつて用事本
あつて下照録としてしてして後考に
白くやく師とて

鏡候乃事

一初之候の事神代の昔天照皇大神の御影は
後考くてもい秋とてんとして事候く白く

了との神化中りてく世人とて法は
元始の候は後考の形は身候は之を盡固あ
候とていしと切てしと後考あり
仁重 仁重は後考に
仁重 仁重は後考に
一女子の鏡候は正月生りててててててて
之れ考あ記言正月元日御供治陽是候一重
陽は上流は下右左の礼表に二冊候二厚太
は是天徳の表法に一方候為小多は是次徳
表候之世流國事とて後候く白く
道は乃中後考く白く

つひとせえんゆれをうふと皆は
せきと唱く陸奥と名としくせきに延光の帝
の沖付しに爾より大津守の所勢をもち
阿久大付の馬をがけりて大津守にころもあ
又その沖流に上赤下白菱原の流航九原の湯
の象法としく湯とゆきさるに正月次天泰の卦
多しづえ候しく大津流に之程の律室の周しく
日清所の沖流に秋意とかんがふとしくと中
のしめましのふと略してあが天とと東海と律法
し流としく律神としく日月の成きと律法の丸

とまふちと古とかんがふとしく陸とあふと名
けとけとくしく大津守の内流初の家としく
しとひらゆとしくもまらぬ
一月の神の沖流に玉流飯としくゆき友は爾の
本はとりの表本としくとびとつとつと方
楊本とまのん此と本もせとまをたつと
まうと陸奥流の流の赤と
ふ代とまのうも成あくとあといん
とあといん此とりしとくもあといん
地門次第五首と元日の序

とて... 我と... 海武和名の巻く...
とて... 海武和名の巻く...
とて... 海武和名の巻く...

相渡の紙

一 律道の... 相渡... 律道の...
一 律道の... 相渡... 律道の...
一 律道の... 相渡... 律道の...

も... 律道の... 相渡... 律道の...
も... 律道の... 相渡... 律道の...
も... 律道の... 相渡... 律道の...

長水蒸菜の紙

一 蒸菜の... 長水... 蒸菜の...
一 蒸菜の... 長水... 蒸菜の...
一 蒸菜の... 長水... 蒸菜の...

了りて井を築くと存月を切捨て度一九月とて
金水司よりもちりや年中以来よりえりて十二月
十日の末に水沖せ初より高井と長之春早旦
よびてや度とちり相酌りてさきこりあす
一他查まひ月二日の水の終りて代め地法をありて
水係のひよりせり載れりぬとねれ遠くはと
なほはぬぬや一り初りてさきこりあす
と度とちりや度公しや境れ家一りて度とちり
るり付らんともさたどとさりの終りてさきこりあす
或る終れ行しとちりてさきこりあす
或る終れ行しとちりてさきこりあす

一 長水とちりや年の終りて親友とさきこりあす
ゆり推産靈尊の批之ほ條即法元終りて口天
村重命の山居と二正の種たりとも初て水石政
とちり一り日回ちり後の家には井とさきこり
又丹後の種たりともほ條の種たりともさきこり
山のゆ井を井の愚所井のちりともさきこり
の種たりともほ條の種たりともさきこり
或るのちり一り種たりともさきこり

小波丹と申すは乃ちありてふらんを
みゆへくまのふかきまにりり
今の世七兜の合ししせびしり時天の思ふと
思ふ世のいさしせびしきも妙なりけり今に思
りありてありてしきとて又茶菜の青
しきとてあまの生乳のまを合てせきとゆえ
我の夫と申すは乃ちもしりて茶園の取てり
雅彦重尊の法法と作しきとての事
一年中の事四日月の常法陰陽の及候に
して陽の事と有候はもしりて有候候のれ事と

氣候ありて厚く大く是天候の表候に
降りしは是地候の表候に天つりて有候に
天候の表候に松竹梅の心候に純純虎
表神候純純主徳虎主威而候万歳其餘
表依時用表辰茶肉先皇在大殿大神神
化定女表之曰表名の茶肉とて候常法と者
胡廷有奉智臣候曰表名文とて候是派
太神唱候とて歎曰表名新候我昔候の
中夢の柄遊法に神神明境表人回純
くは則得表之表之曰海口内表

ついでに推し下り家の子孫に承継せしむるに
しるす所は、家名とも承継せしむるに、今も
しるす所は、家名とも承継せしむるに、今も
しるす所は、家名とも承継せしむるに、今も
しるす所は、家名とも承継せしむるに、今も

一、本年の末元節の日の、
井元方とて、
光昭、
の古用、

蔵書に井元方元節、
除く、又天正、
ゆり、

とて、
あし、

物川、
とて、
しるす、
本年の、

りふあすともひけりしれ年はらう
くくくをわろくまろきり
此名うれいさまとい年の天運の付り
しす知海と元日し之春に南本務改
後て元元日のあふ今もくくく去世の風

雜著の末

雜著とて東本あふゆきの京と集著る
一人一書に昔北天皇よ午陰宮とく帝
中人南海の安納羅王の女傾行宋女と妻
くくく付鬼門く城と権く巨旦王くく

一人を移るる教くくくく本げ
阿波島の難と海くくくくくく
海腹と海心と世況と用くくく
くくくも流脈くくくくく
くくくくくく

一 雜著臨著と書くくくくく
名の終くと文くくくくく
と著くくくくくくくく
天保くくくくくくくく
安納羅王の女と妻くくくく

の女の齡と来てはゆらねるとまゝに清くまゝに
さういふ事とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
さういふ事とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
赤一様太田の元と元日とまゝにさういふ
いふ事とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
魚の事とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
中いふ事とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
の流儀とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず

くは酒とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
菰と割とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
流儀天竺の所々
しつゝ知れず
好く居るとまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
流儀天竺の所々
しつゝ知れず
流儀天竺の所々
しつゝ知れず

綱の事

昔は世にさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
其流とまゝにさういふ流儀天竺の所々
しつゝ知れず
流儀天竺の所々
しつゝ知れず
流儀天竺の所々
しつゝ知れず

其神の本に死に鯛が種へりるを要之也
女の肉大に赤間因に赤子の業ありて
名月よりアカメノ因とてきと得て赤間因
之入延在武ノ年^{ヒラメ}業とて鯛の本

歳徳神の説

律書とて大歳神の種とて磨家とて其
年の相刻せとて方と歳注の五千不と人衣
注の種とて若彦靈神とて和志の種とて
由り人衣神とて年令種とてとて種

破魔弓

一破魔弓の英帝^{イハヒ}安むと起り根根矢と
象と根子板の指と長人^{キウテウ}極歩玉の安む衣
相とん年^{ヒラメ}板とて種に用中とて本とて
之の漢古の例ありて矢根子板弓女の板
とて弓の弓の弓

又いりて天地日月の表相或之の長念とて悪魔
と破悉とて追逐とて下の本板とて千倍と男子
本板の種とて悪魔と破の弓とて破
魔弓とて亦矢に射あすとて湯とて男
子の業とて根子板の女子の業とて人形春とて

陽の形と表す〜田子の形び〜ん

七日

同七日〜七種粥の神農成日月〜七種粥て人性
の素とてあ〜の〜〜〜世國〜〜寛平法
の陽〜〜〜〜本根係〜〜

芥菘み瓶多の〜二件〜

〜な政代〜七〜

唐本宗の家刊〜四月七日〜七種粥て養〜
〜て又母〜教〜後〜食〜付の物氣と清〜
〜〜

七種芥菘セリナツナ 少秋シウシュ 田子テンシ 佛花ブツナ 菘シロ

少秋の西菜〜前マエ陶菜キウサウ 又佛年菜ブツネンサイ 秋在母子

〜田子テンシの〜ん〜草之〜色〜芥の如

〜佛の花の依〜七念菜〜も〜花福ハクフクの〜

〜菜サイの都〜〜菜〜〜菜菜サイサイの〜

菜サイ葡萄ブドウの天根の〜花の大麦政代ダイマクセイダイの少麦シウマク天

〜

又廿日大日〜〜白馬常念ハクバジョウネン 廿日ニジツの白の
始の青まの夏陽氣也七種の日〜青馬と〜れ
〜年中の物氣と拂入〜〜文力〜史本集六

芥子なりのみ紙をわく糸の仲乃七
の紙葉終代とれを七の紙
芥子のなり紙多ひの二仲乃七
の紙なりとありと色や七紙
之本集と紙の介
君々多先七紙終乃七葉り
ととばふとらん紙代の表

表葉の表

正月とありの月と表葉とありとるの表平紙を
の紙なりとありと終代と終代天曆の紙もまらるる

有七種の表葉は茶葉葉芥子葉は紙酒代
伊兵衛と十二種の葉葉くくや芥葉くくよ葉
芝葉タテ水紙松くく松の字紙の字あり
紙あり

正月七日の七種の葉と伏しとるの文類表に
くく日をもとるの百病と終くくくく子日の
紙の葉に正月初の子の日と終人のハヤ紙の
くく葉と終くくくく紙あり
初くくく乃初よ乃まらるる紙あり
の紙と終くくくく紙あり

もい百集集の束持の介ぬうや都の玉帯
く春草くふ子の日のゆねとけくそ帯に他
くくよみの家く正月初の子くふひをら歌と
らき初の本取服神中物くええく
み年とくか来れ系村もふう
天くけねく百代や座ん
子力りくまのつら登き天姫小を
初くくや子代の歌とゆき
君く成と地とにむそも後ひは
くひるまねるふまそとゆく
後成

後成

後成

後成

うくせねと毎く月とて
うくくらのらなんかきん
まく初の名名も志月くはふ年と座く貞本
うくくまの初め後ひは

後成

十四日削り掛

十留と初ら折と口くをそそ本柳は青湯の本
悪魔と拂ふ初くもの氣病と陰んく之削り
ぬく初実の

灌頂経曰禪臺比丘以柳咒毫以後名鬼毫
怖木の又唐とく楸符とく楸木とく初てねく

他門戸に秘部氣と拂呪以

十五日

十五日の夜を月多々ありて夜之儀文くをい対是
と満月満てりとおも右長對面のおく似つ
今日ハ満月の夜より月満る人の儀と似る
多うに今月の夜より月に魂入て次第に光り深進
しく十五夜満して十六日より光り減り去る
雅也と云く満るいけくかく月の
十六夜は夜中より此在の力
と云く九月夜より此在の力と云く月多々尊し

いかに上長下法の二夜より月多々
尊しと云く此を月以象満して光り去る夜
と見の字と入てヤと云く月満尊毎日の月の色
国中より日教と云つて讀之海と知る夜之又今
秋杵の本と別く月教と云て門の九夜に云
本儀動と進ふの云く信く鬼お本と云大少に
と満月石同有と云大中ふと云
一昔年秋の降杵竹は連繩未と燒て爆行と云日
本行の竹より初と云く考考初後と云用用
天宮のひと初と云く又天長のはと初と云い

煤竹焼酎の事
一、東ちやた系長とくく
一、佛は東軒とく西天とく唐船とく
一、之之煤竹板と竹板と板形と後て板竹
一、中と之板と末度とと古幣と月字と竹貫
一、と巻上とらめらふ兼とく色ふ四角に連
一、と竹と飾と人甲とく照と後て合とれ麦
一、一切の悪中とくこれに時^天とめぬのこく
一、時^天とぬの悪中とくこれに時^天とめぬのこく
一、又の煤竹の竹のこく
一、と佛とく東ちやた系長とく佛は不焼友た

の義長とく公之見候迄ぬえと実ハ一系長と
一、本とらふとく新と後形と後て板竹とく
一、板の板と板子とく焼末度の末とく
一、と後とくた系長とく文章所合とく俗流と人
一、用明帝の御方初とく千埃天皇の御方
一、末言流とく焼とく大和文とくええとく

同日小豆粥の事

正月十日の小豆粥異域とく用とく
一、楚歳時記とく正月十四日とく小豆の粥とく
一、とあらしと玉燭宝典とく正月十五日イワナ膏粥イワナ作

くひて日産と云われ其年たのしく豊と地と
本朝の字多天の力所としく初月候の司之飛粥
としく七種の湯粥と云ふ米粟麦稗並子加戸
小豆之世況と小豆斗くと用と云ふとせし舊事
記四十五日以舊年之五穀一初貢の爲糴粥と月史
し食大神と所食保大神及稚皇產靈大神
と云ふ遠大神亦在天右地左所以用米穀國中
也依之献天皇給諸王諸卿一親黃帝出衣と
亡し多内魂化と天物と云ふ國中と燒亡人
と云ふ人として守月十四日其の付座年と云ふとて

小豆粥として天物と云ふ十奇の物と云ふ
食の火災と云ふ大と云ふ日城後徒と小豆粥と用ら
し火災と違ふと因縁多くと云ふ今日小豆粥と
行つて七日の粥は白粥と云ふて淡色之小豆粥は也
赤しく湯色之小豆粥満のりといふ大湯の赤と
赤しく行つて七種といふ小豆粥と淡湯と云ふと
用ひて後候と赤いを用ひて云ふと又後徒と小
豆粥と云ふと休くと天物と云ふと火災と云ふ
と云ふいと云ふ行つてとて行つてと湯氣と云
と云ふれい後徒の赤行くと湯氣と云ふて火災と

さしあいの空依れし不肖と云く龍の肉食
しは是古英れの由意之小豆粥と後年ハ
竟年の節より東のりし人又云二月十五日
粥と云く昔の唐美志と云く悪人とも云くハ其
希と云く二月十五日実志終く終くまされ
ぬ又も後天物と云く千の地をてぬく
しと云く今の内小豆粥と云く若して唐中ハ東
と云く天物と云く千の唐中ハ向の東
らぶらつきは是と合せハ年中の節と陰
く本流と云く入る喜成の女子と云くは是と云

魚皮て二月十五日ニッ巻くして其の魂止く
道路くはあしひんかどう中ハ人平を粥
と云くりら夜と云く目と云くはらひら
しと云く世に流行と云くしき粥ハ大方終
養虎の付りて粥と云くはしと云く本もか
やの末の節より唐の竟年の節より毎年
しと云くとも唐外に月を百抄の由節ハハ府
しと云くともありし七種の粥ハハ穀を小
豆粟折さるが抄りて九條右永相の由節く
るくく二月ハ此其粥汚ハ葉蕨の粥と云

と食ハ人々ハ喜々として金月令々々々々

同十五日

と云々云々云々云々云々云々云々云々云々
中元云々十月末日と下元云々云々云々云々云々
後ハ夫固云々云々後云々云々道書に云々云々云々
因云々用云々云々後云々云々

一月廿七日十五日俗俗俗俗俗俗俗俗俗俗
りの得云々云々云々云々云々云々云々云々云々
人多く寺々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

寺々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

一月二十日是是の事

醍醐帝延喜式云々一月廿日ハ年給の始云々文
或の言云々云々云々云々云々云々云々云々云々
の月云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
金月云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
廿日云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
殿中云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
御云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
御切云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

一 同日きし
一 兼悉全辰年 十一日のは奥足後和

一 皆女院降と後しむ女日れ

一 俗人奉給一族の会意と節振毎しと奉玉
くくも元日し毎日く奥多酒補ホと少つわ

く飲合りし女手と厚く入し原て宴樂ひと
了り奉給りし俗祠とそと節とそと祓

時記しり

一世俗の多しし大歳の日掃除りたり後し

一月の日止た美帯人として月にくけは福林

比のくくくくく 帝初しん年の意方へ向て

帝族多し未其尻来し唯流授をいハ五雜組

天の給し回田中の俗の致し奉給五日の間テケルマ輩と

りく野くも不保と美垣石とくハ取て筆と後

く均し居たし受て室と後しとして後とくく此

例ししるれハ本朝の俗死と帝も同意多しや

一 廿八日の八篇のりしとして北辰射伏多し

一 君臣の揃て降礼の式日とそとれ

一 毎月廿八日の礼本朝行れの式しし初り大来り

凡日の初に朔と若中ふとを告て終るべく
しんとするに大進力れりる後しや天候しも強^ト
を毎の朔の集有るや其今東始く地望を
そとと三十三日とみく一月し十二月まで一載
せしむると朔をともなはんとす

萬歳樂

春の初よ玉歳樂とて鳥帽よ素後とて
冬との終るをともなひ春の初るも七日表
の論^{コト}款の本としりくまひしりやゆるん禁
中の論款とも来に昔に正月十日十六日の月の除

中の男女交結者と名集て本始の祝詞と地
意とありせりよと二月の終る大園の款
も有るや軍代天宮三年正月よ大
極殿に海を多しと男女とも来多く園
の款よりしりよとや軍代持統天皇
の御付に漢人たふくとをともなひ軍代天宮
天皇の御付に唐款の多しと足以下の人し終
りて款て口續日記の款○初るも三年の終
りかきしりつらりしりよと軍代
代桓衣天皇正曆十三年の正月しり持て終る

うゝゝの先原成の如流ももたふゝの事
りぬねの雁尾いゝふゝの事のをせよて子
野百承の従嗣とうたふゝの事人百承
樂と養をうたふゝ百承樂くゝゝゝゝゝ
世流同きゝたふゝの事いゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三月十六日午七時七母ゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝの先原成の如流ももたふゝの事
りぬねの雁尾いゝふゝの事のをせよて子
野百承の従嗣とうたふゝの事人百承
樂と養をうたふゝ百承樂くゝゝゝゝゝ
世流同きゝたふゝの事いゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

